

# 好運の光景としての戦争

## 「無神学大全」の日記的断章の意味

長井 文

### 序

『有罪者』（1944年）、『内的体験』（1943年）、『ニーチェについて』（1945年）の三冊からなる「無神学大全」は、ジョルジュ・バタイユの代表作と言える。内的体験、好運、恍惚、供儀、ポエジーなど、バタイユ思想の根幹に関わる重要なテーマが論じられている本三部作は、それまでのバタイユ思想のまさに集大成であると同時に<sup>1</sup>、後期作品の萌芽も感じさせる極めて重要な作品なのだ。

しかしその一方で、本大全がバタイユの典型的な作品だとは必ずしも言えないのではないだろうか。というのも、作家の個人的な生活や体験がこれほどの分量および頻度で思索を語る言説の中に挿入されている作品は、バタイユの理論書の中でも他に例を見ないからである。確かに議論の中断や途中放棄は、他のバタイユの作品でも行われている。しかし一貫性を持たせるための作業を十全に行えなかったという怠慢によってではなく、表現を思想の運動に呼応させようと、「全体の均質性を保証しないという確固たる意志<sup>2</sup>」によって、あえて議論の一貫性を破壊したとされる本書の構成は、バタイユの理論書の中でも破格と言える。

こうした断絶を生み出す装置として機能している要素の一つが、恋愛と戦争体験が語られる断章である。「無神学大全」には思索の展開と平行して、あるいは中断する形で、バタイユの個人的な体験がしばしば挿入される。第二次世界大戦が勃発し、『有罪者』が書き始められる前年の秋に、バタイユの自宅で息を引き取った愛人ロールことコレット・ペニョの追憶や、1939年

<sup>1</sup> バタイユは自分の過去のテキストを「刑苦への前歴」として『内的体験』に収録している。吉田氏はそこに、それまでの自身の探求のエッセンスを成す部分を、内的体験への問いへと集約しようとするバタイユの意志を読み取っている。吉田裕、『バタイユの迷宮』、書肆山田、2007年、50頁。

<sup>2</sup> Georges Bataille, *L'Expérience intérieure* (1943), *Œuvres complètes*, t. V, Gallimard, 1973, p. 18. なお、本稿でバタイユ全集を引用する際には、以後 O.C. と略記する。また、今後バタイユの作品を引用する際には、著者名は省略する。

冬から関係が始まった愛人ドゥニーズ・ロランとの強烈な出会いと不和、のちにバタイユの二人目の妻となるディアヌ・コチュベとの恋は、「無神学大全」期の思想形成に大きな影響を与えている。バタイユが彼女たちとの関係の中で見出したことは、考察すべき興味深い問題を含んでいるが、本稿では、本三部作中で頻繁に言及される第二次世界大戦について考えたい。

さまざまな状況を考え合わせると、第二次世界大戦が「無神学大全」にとって重要な契機となっていることは間違いないと思われる。けれども本作品群の主要テーマは、神秘体験や好運など戦争とは直接関係のない問題であって、戦争そのものではない。これが両者の関係のねじれとなり、では具体的にこの二つがどのような意味で結びついているかということ、必ずしも明確になってはいないのである。

本稿の目的は、「無神学大全」中の戦争の記述をめぐるこうしたねじれを解きほぐし、戦争と当時のバタイユ思想の関係を明確にすることにある。それは戦争というテーマを通してバタイユ思想を検討しなおすと同時に、「無神学大全」に散りばめられた、戦争体験を綴った日記風の断章の意義を問う試みにもなるだろう。

## 第二次世界大戦と「無神学大全」

第二次世界大戦中、バタイユは精力的に執筆活動を行い、「無神学大全」三部作の他にも数々の作品を生み出した。『内的体験』第二部「刑苦」と表裏一体の関係にあるといわれる『マダム・エドワルダ』、戦時中に訪れたノルマンディーの小さな村で書いたとされる『死者』、あるいは唯一の詩集『大天使のように』もこの時期に書かれた作品である。言うまでもなく、これらの作品も多かれ少なかれこの戦争の影響を受けている。

しかし中でも第二次世界大戦との関係が濃密なのは、やはり「無神学大全」ではないだろうか。というのも、墜落した飛行機の残骸の中にドイツ軍兵士の片足だけが無傷のまま落ちているのを見つけたという逸話が登場する『死者』序文草稿をのぞけば<sup>3</sup>、戦争体験が語られる作品は「無神学大全」だけなのである。

しかも戦争は、個別に発表された「無神学大全」の各作品を結ぶ糸にもなっ

---

<sup>3</sup> « Aristide l'aveugle », *Le Mort* (1971), *Georges Bataille Romans et récits*, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2004, p. 404-405.

ている。「私がこの日（1939年9月5日<sup>4</sup>）に筆を下ろしたのは偶然ではない。事件が起きたから書き始めたのだ<sup>5</sup>」という一節からも明らかのように、大全第一巻にあたる『有罪者』は、第二次世界大戦を発端に書き始められ、大全最終巻の『ニーチェについて』の本編<sup>6</sup>は、フランスにおける第二次世界大戦の終局である1944年8月のパリ解放を見届けて終わっている。当初は特につながりのない別個の作品として書かれていたため<sup>7</sup>、この三作品には語句や主題に微妙な違いがあるが、執筆が開始された年代に従って「無神学大全」が編まれたことで、この三部作をバタイユの戦時中の手記として読むことも可能になっているのである。つまり、戦争はその違いを超えて三作品を繋ぎ、一つの「大全」としてとりまとめる役割を果たしているのだ。

それではバタイユは、第二次世界大戦時にはどのような日々を送っていたのだろうか。戦争勃発当時、四十二歳の誕生日を直前に控えていたバタイユは、年齢のせいか徴兵を免れ、非戦闘員として第二次世界大戦を生きた。第一次世界大戦時には、結局前線には出なかったとはいえ、歩兵部隊で軍事訓練を受けたそうであるが<sup>8</sup>、第二次世界大戦中には、軍事行為に参加することは一度もなかったことになる。また、結核治療<sup>9</sup>でパリと地方を転々とする生活の中で、爆撃や空襲などの戦闘行為に巻き込まれたこともなかったし、体制に従っていたわけではないものの<sup>10</sup>、政治的な活動には関与しなかったので秘密警察に追われることもなかった。

このように、表層的には戦時中も比較的平穏な日々を送っていたかに見え

---

<sup>4</sup> 1939年9月2日のドイツ軍によるポーランド侵攻を受けて、フランスは翌3日に対独宣戦布告を行っている。

<sup>5</sup> *Le Coupable* (1944), *O.C.*, t. V, *op. cit.*, p. 245.

<sup>6</sup> 『ニーチェについて』の本編は三部構成で、第一、第二部はニーチェのテキストの引用およびそれに対するバタイユのコメントで、続く第三部は1944年2月から8月までのバタイユの日記からなる。その他に、本作品には「補遺」として六本の短い論文が収録されている。

<sup>7</sup> バタイユの既刊作品を「無神学大全」という大全にまとめたおそうという計画は、各作品の初版がすでに出版されていた1950年に持ち上がったものである。「Plans pour la Somme athéologique», *O.C.*, t. VI, Gallimard, 1973, p. 360-374.

<sup>8</sup> « Chronologie », rédigée par Marina Galletti, *Georges Bataille Romans et récits*, *op. cit.*, p. XCV. 1916年の項目参照。

<sup>9</sup> バタイユは1942年に結核に罹り、以後1944年まで断続的に治療を行っている。*Ibid.*, p. CXVI- CXIX.

<sup>10</sup> 戦争中バタイユは、ユダヤ人思想家ヴォルター・ベンヤミンの原稿を隠し持っていたり (*Choix de lettres 1917-1962*, édité par Michel Surya, Gallimard, 1997, p. 242)、ユダヤ人の知人やレジスタンス運動に加担した友人を匿ったりしていたようである。「Chronologie», *op. cit.*, p. CXVII.

るバタイユであるが、「無神学大全」で戦争を語る際に選んだのは不安という言葉であった。湯浅氏が指摘しているように<sup>11</sup>、バタイユの後期作品における戦争論は、古代人にとっての戦争の意味や、戦争の原初形態を問題にする人類学的アプローチと、戦争を人間の社会的営みの一環として考える社会学的アプローチを基軸とする分析的なものである。戦争（戦闘行為）は、宗教やエロティスムに関する理論を支える格好の実例だったのだ。それに対し、「無神学大全」においてはそうしたアカデミックな分析ではなく、バタイユの実際の戦争体験に基づいて戦争が語られており、この点が「無神学大全」期の戦争論考の最大の特色だと言える。

実際に戦争の渦中にあったバタイユにとって、戦争とは不安以外の何ものでもなかった。戦争は不安から生まれ、不安を生み出すものなのだ。『有罪者』草稿で、バタイユは以下のように述べている。

戦争が力強く物語るのは、決して何ものにもなだめることのできない動揺だ。あらゆる政治的要求は、外的なものにせよ内的なものにせよ、見せかけにすぎず、その下にはこの種の激しい不安が隠されている。その不安は、常に変化と破壊を求めているのだ<sup>12</sup>。

戦争の原因は不安定を求める人間の性質にこそあり、政治はその副次的要因にすぎないというこの引用文は、『ドキュマン』廃刊以降は芸術から政治へとその関心をシフトさせていたバタイユの政治離れが垣間見られる箇所であろう。1936年に瓦解したコントロール＝アタックでの活動を最後に、一切の政治的活動から身を引いた理由をバタイユはついに明かさなかったが、こうした言葉から察するに、政治的活動を行ううちに、真の問題は政治そのものよりも、政治の背後で政治を動かすこの不穏な衝動にあるという思いを強くしたのかもしれない。

さらにバタイユは、不安は戦争の原因になるだけでなく、戦争が不安の原因にもなるとも言っている。

[1939年] 9月からこの6月まで、戦争がそこに現前する限り、戦争について私の持つ意識は不安でできていた。戦争の中に私が見たのは、日常的な生活と

<sup>11</sup> 湯浅博雄、『バタイユ 消尽』、講談社、2006年、39-40頁。

<sup>12</sup> Note du *Coupable*, op. cit., p. 499. 作品未収録のテキストを、採用されたテキストと同列に論じるのは危険であるが、直前にヒトラーへの言及があるこの断章は、政治的理由から作品に収録されなかったと考えるのが妥当であって、内容上の問題によって決定稿から除外されたのではないと判断した。

言われているものに欠けているもの、すなわち、怯えさせるもの、恐怖と不安を引き起こすものだ<sup>13</sup>。

戦時中のバタイユは、大きな事件に巻き込まれることもなく、「穏やかな」暮らしをしていたことは先ほど確認したが、だからといって不安から自由だったわけではない。『ニーチェについて』で、空襲警報および襲来する飛行機の爆音が、「病的な」恐怖を呼び起こすと告白しているように<sup>14</sup>、空襲警報が引き金になって不安に陥るといふ記述は「無神学大全」に繰り返し現れる。かりそめの平安を引き裂く合図のように、空襲警報や飛行機の音は、不安に火をつける契機となり、バタイユを脅かしたのだ。

とはいえ厳密に言えば、バタイユを恐怖に陥れたのは、戦闘行為そのものではない。飛行機の音が病的な不安をかきたてるというさきほどの断章の先に、「全てはゆらぎないように思える。飛行機の一群がやってきた。そして警報が…。おそらくは何でもないのだ。しかし再び、すべてが賭けの状態に入る<sup>15</sup>」という一節があるが、ここで重点が置かれているのは、戦闘そのものというよりは、戦闘機の襲来によって一切が賭けの状態に入ることであろう。つまりバタイユに不安を与えるのは、先の見えない未来に向けて、この一瞬に宙吊りになることなのだ。別の例を引こう。パリ解放成功後も進軍を続けた連合軍が、バタイユが当時逗留していたパリ南東フォンテーヌブローの森近くのサモワに到達した折に、バタイユは大勢で戦闘地域から少し離れたところに爆撃の音を聞きに出かけている。空襲警報や飛行機の爆音にあれほど怯えていたにも拘らず、バタイユはこの時は一切不安を覚えなかったそうである<sup>16</sup>。バタイユはその原因を、詳しい戦況情報が不足していたことに求めているが、どちらが勝っているのか、あるいは誰と誰が戦っているのかすら分からない、完全の無知状態で戦闘行為を見物することほど恐ろしいものはないはずである。その時すでにドイツ軍の敗北が決定的になっていたという事実も、この戦闘によってバタイユの不安が駆り立てられなかった大きな要因となったのではないだろうか。結果の予測がある程度可能だったがゆえに、その時の戦闘は、先行きの見えない完全な「賭け」にはならなかったのだ。

もちろん、戦時下に限らずとも、未来はつねに予測不能のものである。し

---

<sup>13</sup> *Le Coupable*, op. cit., p. 294.

<sup>14</sup> *Sur Nietzsche* (1945), O.C., t. VI, op. cit., p. 142.

<sup>15</sup> *Ibid.*, p. 147.

<sup>16</sup> *Ibid.*, p. 178.

かしいつ何が起きるか分からない戦時中の未来は、平常時よりもずっと不確かな描きにくいものになる。その意味で、戦争は未来を奪うと言えるだろう。戦争はそこに生きる人間を、あやふやな現在という一点に放擲する。バタイユが戦争の本質として焦点をあてるのは、むしろ未知そのものに対する恐怖、未来から断絶された、理解不能な現在に宙吊りにされることに対する恐怖なのだ。

戦争が未来を奪い、人間をはかない現実に宙吊りにすることを指摘したのはバタイユだけではない。イギリス、あるいは第一次世界大戦時に比べ、戦災被害が少ないかに見えるフランスは、実は物理的被害よりもっと深刻な、未来の喪失という被害を第二次世界大戦によって被ったとジャン＝ポール・サルトルは訴える。

最も耐えがたかったのは、パリ市民はみな非人格化されてしまったことだろう。戦争前、私たちが子供や若い男女をほほえましく思いながら眺めていたのは、彼らの未来を感じ取り、漠然とではあるが、彼らの仕草やその顔に刻み込まれた皺の中に、彼らの未来を見抜いていたからなのだ。というも、生ける人間とは、何よりもまず企て、企図なのだから。しかし占領は、人々から未来を奪い去ってしまった。もはや私たちはカップルを目で追いながら、彼らの未来を思い描いたりはしない。私たちは未来として、一本の釘かドアの掛けがね程度のものしか持ち合わせていない。私たちの行為はどれもかりそめのものであり、その意味はそれが完遂されるその日一日限りのものなのだ<sup>17</sup>。

戦争が未来を不可能にするという点で、サルトルの主張はバタイユのそれと一致するが、未来の喪失のもたらす結果に対する評価は、両者の間で大きく異なる。根強いレジスタンス運動や、ド・ゴールによる自由フランス政府は興ったものの、ドイツに首都を奪われた上に、親独傀儡政権の樹立を許したフランスがドイツ軍を撤退させるには、連合軍の援助に頼る他はなかった。こうした受動的な状態は、フランス国民から未来だけでなく、他人に共感する力や生きる意欲も奪うとサルトルは考えたのだ。「生ける人間とは、何よりもまず企てであり、試みである」という一文に彼の理念が簡潔に表されているが、サルトルにとって能動的に行動できない状態は、人間が人間ではなくなった耐えがたい状態なのである。

これに対してバタイユは、未来の喪失を悲観しない。むしろ、目的という

---

<sup>17</sup> Jean-Paul Sartre, « Paris sous l'occupation », *La France libre* (1945), *Situations [III]*, Gallimard, 1992, p. 28-30.

未来に現実を従属させる行為に他ならない企てに忙殺され、現在をおろそかにする方が、バタイユにとってはよほど嘆かわしいのだ。したがって未来を失い、その時その時を生きるしかない戦争状態は、企てからの解放として好意的に受け止められている。戦争勃発時を振り返り、バタイユは以下のように述べる。

ひと月ほど前に、すべてを疑問に付す大激動にうながされて、私はこの本を書き始めたのだった。この激動は、そのとき私のはまり込んでいたさまざまな企てから私を解放してくれたのだ。戦争が勃発したので、私はもう待っていられなくなった。正確には解放を、私にとってはこの書物という解放を待っていられなくなったのだ<sup>18</sup>。

サルトルの言うように、戦争はあらゆる企てを無化する。自分がこの戦争を生き抜けるかどうかも定かでない状態で計画される企てほど不確かなものではなく、いつまで続くとも知れぬ戦争が終わるまでは、一切が保留状態になることを余儀なくされる。実際、戦争勃発によって、バタイユが中心となって運営していた秘密結社アセファルと社会学研究会の解散は決定的になった。

しかしその一方で、サルトルによれば何も生み出さないはずの時間を利用して、バタイユは思索というきわめて人間的な営みを精力的に行い、その成果を数々の作品にまとめあげたのだった。「私は戦争に思考を集中した。すると思考を恐怖の中で見失ってしまった。私の目には、戦争とは刑苦であり、屋根のてっぺんからの転落であり、火山の噴火と映った<sup>19</sup>」とバタイユは言う。そのようにして戦争に思索を集中した結実のひとつが好運の思想なのだ。

## 好運

「戦争状態が現在までに私にもたらしたのは、究極の好運だけだ<sup>20</sup>」と言われているように、好運 chance は本三部作中に登場する主要テーマの中でも戦争との結びつきが強い概念である。とはいえ、バタイユのテキストで好運という言葉が用いられたのは、「無神学大全」が初めてではない。1938年に発表された「魔法使いの弟子」でバタイユは、理性（必然）によって限界づけられた人間の生の全体性を回復させうる偶然 *hasard* の同義語としてこの語

---

<sup>18</sup> *Le Coupable, op. cit.*, p. 264.

<sup>19</sup> *Ibid.*, p. 294.

<sup>20</sup> *Note du Coupable, op. cit.*, p. 516.

を用いているし<sup>21</sup>、またその四ヶ月後には、人間の生に意味を与える役割を好運に担わせた「好運」というテキストを発表している<sup>22</sup>。したがってこの概念は、戦争体験から生まれたというわけではないのである。

しかしその後「無神学大全」三部作において、内的体験と名づけられた神秘体験や、ニーチェの運命愛との関連<sup>23</sup>で好運が語られるようになってはじめて、好運にまつわるバタイユの思索は一気に深化し、好運はバタイユ独自の概念として確立されたのだ。その重要性は、好運を待つという受動性のうちにバタイユ思想の大きな変化を見る濱野氏<sup>24</sup>や、「無神学大全」の中でバタイユ思想の軸が内的体験から好運へとシフトしていったと考える吉田氏<sup>25</sup>の研究などで指摘されている。このように、好運はバタイユ思想の展開を考える上で無視できない問題を含んでいるが、本稿の主旨は好運の全体像の把握にはない。そこで本稿では好運についての踏み込んだ議論は控え、その主要な特徴を概観するにとどめることにする。

それでは一般的な意味での好運には、どのような意味があるだろうか。仏仏辞書『プチ・ロベール』によれば、「さいころが落下するさま」という意味を語源に持つこの語には、以下の三つの意味がある。まず第一に、結果の良し悪しは関係なく、それにより何らかの出来事が生じること、あるいは幸運と不運を差配する力そのものという意味、そして次に偶然に物事が生じる可能性という意味、さらに幸運、好ましい運という三つの意味があり、用法的に最も古いのは第一の定義である<sup>26</sup>。日本語の「好運」という語は、第三の意味のニュアンスが強い言葉であるが<sup>27</sup>、バタイユの考えるそれはむしろ、最も古いという第一の意味に近い。

好運は最終期日 *écheance* と同じ語源（落下 *cadentia*）を持つ。好運とは偶然やってくるもの、落ち来たるものなのだ（もともとは、好運でも不運でもどちらで

<sup>21</sup> « L'Apprenti sorcier », *NRF*, n° 298 (1938), *O.C.*, t. I, Gallimard, 1970, p. 534.

<sup>22</sup> « La Chance », *Verve*, vol. I, n° 4 (1938), *op. cit.*, p. 541-544.

<sup>23</sup> 好運とニーチェの運命愛との関連については、以下の解説に詳しい。酒井健、「訳者あとがき」、『ニーチェについて』、現代思潮社、1992年。

<sup>24</sup> Koichiro Hamano, *Georges Bataille : la perte, le don et l'écriture*, Éditions universitaires de Dijon, 2004.

<sup>25</sup> 吉田裕、前掲書。

<sup>26</sup> *Le Nouveau Petit Robert*, SNR Le Robert, 2007, p. 391-392.

<sup>27</sup> *chance* は文脈によっては「運」、「好機」とも訳しうるが、わが国のバタイユ研究においては、「好運」という訳語がすでに用語として定着しているため、本稿では *chance* の訳語を「好運」で統一した。



もよかった)。それは偶然、さいころの落下である<sup>28</sup>。

どこに落ちるか分からない「引きしぼられた矢<sup>29</sup>」にも喩えられるバタイユの好運は、その偶然性に重点が置かれている。好運とは、この先どうなるか分からないという留保、予測不能な未来への跳躍であって、人は落ち来たる好運をただ受け取ることしかできないのだ。

このような性質を持つ好運が、規則とは相容れないことはごく当然のことであろう。好運がはねつける規則として「無神学大全」で挙げられている規則は二点あり、そのうちの一点は論理的整合性である。合理性に基づく因果律から導き出されたもの、あるいは因果律に則ったものは、偶然の反対概念である必然であり、両者は決して重なり合うことはない。合理的思考に則って好運の姿を描き出そうとするこの不可能性を提示するために、バタイユはしばしば確率論を引き合いに出している。

好運にそぐわないものとしてバタイユが拒むもう一つの規則は、不運を好運から排除する倫理観である。バタイユは好運に不運をも含めることを求めるのだ。もちろん、「幸運」という意味で「好運」という語を用いる場合も皆無ではなく、識別が難しくはあるが、原則的に彼がタームとして用いる「好運」においては、その幸・不幸は問題にならない。先ほど参照した『プチ・ロベール』の第三の定義は、バタイユの考える好運の十分条件ではあっても、必要条件にはならないのである。

好運は混沌から生まれるのであって、規則から生まれるのではない。それは偶然を求め、その光は暗闇の中で輝く。不運から守ってやろうとすれば、好運は私たちのもとを去ってしまう。そして私たちが好運を失うやいなや、好運は輝きを失うのだ<sup>30</sup>。

不運を悪とし、好運から排除しようとする価値観が、ここでは「規則」として否定されている。こうした操作は、好運を何かの規則に依拠させることであり、それは「たまたま落ち来たるもの」という好運の性質を著しく損なってしまうのだ。

バタイユは「よきこと」を好運とみなす通常の意味での好運を、自らが取り上げようとする好運と区別し、前者を「個人的な好運<sup>31</sup>」と定義している

<sup>28</sup> *Sur Nietzsche, op. cit.*, p. 85.

<sup>29</sup> *Le Coupable, op. cit.*, p. 318-319.

<sup>30</sup> *Ibid.*, p. 314.

<sup>31</sup> *Ibid.*, p. 317.

が、そのような好運観は、以下の「曖昧な判断」と「明確な判断」の議論にも見受けられる。一般的に考えれば、グレーゾーンのない判断が「明確」と形容されるにふさわしいのだが、グレーゾーンを認めない善悪判断を「曖昧な判断」、そして好運に不運も含める価値判断を「明確な判断」という奇妙な基準で両者を規定した上で、バタイユは次のように述べる。

人間一般が好運なのか不運なのかを知ることはできない。[中略] 明確な判断は、悪という事実を受け入れ、悪（存在の癒しがたい傷口）に対する善の戦いを受容する。曖昧な判断にあっては、価値はもはや条件つきのものではない。私たちであるところの善は、好運ではなく負債になってしまう。それは「そうあるべき」という義務に呼応する「そうである」だ<sup>32</sup>。

判断する人の立場によってその評価が大きく変わるため、善悪の判断は、本質的に恣意的である。好運なのか不運なのかを客観的に判断することなど不可能なのだ。この原則に背き、よいことだけぞ善とみなす倫理に基づいた「善」、すなわち、好運から不運を排除した「善」は、「善」ではなく「負債」であるとバタイユは主張する。彼にとって善は、気まぐれな運命の入り込む余地がある限りにおいて「善」なのだ。バタイユのこうした倫理観は明らかに通常の善悪基準を逸脱しており、そうした価値観に則って定義される好運もまた、一般的な倫理を超越していると言える。

興味深いのは、超論理、超倫理という性格を持つ好運が、「無神学大全」では他者との交流としばしば同一視されている点である。好運の未完了性を根拠に、バタイユは好運を交流に結びつける。論理や倫理の類には一切従わないということは、常に未完了な状態にあるということである。何を契機に訪れ、何を契機に去るのかが分からないだけでなく、幸運なのか不運なのかすら判断しかねるというバタイユの好運の未決定性は、すでに最終決断が下されて完了しているものに自身を対立させるのだ。

汚されない好運など存在しない。亀裂のない美は存在しない。完璧な好運、完璧な美とは、もはや好運でも美でもなく、規則である<sup>33</sup>。

決定的な形を取れば、好運はもう好運ではなくなってしまうだろう。その逆に世界に何らかの決定的な存在があるとすれば、その存在にはもう好運はないの

---

<sup>32</sup> *Le Coupable, op. cit.*, p. 312.

<sup>33</sup> *Ibid.*, p. 315.

である（その存在の中で好運は死んでしまっているのだ）<sup>34</sup>。

こうした性質を持つ好運は、自身が未完了であるのみならず、おのれが降りかかる対象をも未完了にしてしまう。不意に訪れる好運は、それまでは確固たる自我を持つ自律した、それゆえに孤立した人間に傷を穿ち、外界と交わることを促すのである。このような意味で好運は交流であり、接触であり、愛なのだ。

私はこの好運を、数学的形式においてではなく、ある人間を、その人を取り巻くものと和解させるひとつの接触として思い描いた<sup>35</sup>。

愛において好運は、まず恋に落ちた人間が愛する人の中に探し求めるものである。だがまた好運は、ふたりの出会いの中にも与えられる<sup>36</sup>。

好運は交流だと断言するバタイユの唐突な一言の背後には、このような論理が働いている。初期バタイユ思想においてはひたすらに暴力的なイメージをまとっていた合理性の否定は、「無神学大全」期には融和へと続く破壊として描かれるようになる。論理と倫理を超越しているという好運の性質は、『プチ・ロベール』で確認した第一、第二の定義にも言えることであり、その意味ではバタイユ独自の発想とは言えない。むしろそうした性質を持つ好運を、交流にまで結びつけてしまう点にこそ、バタイユの好運の特殊性が現れていると言えるだろう。

先行きが全く見えぬまま瞬間に宙吊りにされるがゆえに、バタイユの語る好運は場合によってはとてつもない恐怖となる。実際、「無神学大全」中の好運をめぐる言説には、不安という言葉が多く登場しており、果たしてこれが「好」運と言えるのかという疑問が沸き起こる悲痛な調子の断章もある。

しかし結論を言うと、それでもそのような好運は、バタイユにとってはやはり喜ばしき運なのである。なぜなら人は好運が訪れるその瞬間に、偶然を排除する論理の網を張りめぐらせた世界から逃れられるのだから。バタイユにとって、好運は日常世界から脱出するための突破口なのだ。

ふだん私たちは、この〔好運の彼岸的な〕性格を否定している。私たちにできるのは、この性格を否定し、二義的な役割に降格させられた偶然を耐え忍ぶた

---

<sup>34</sup> *Le Coupable, op. cit.*, p. 319-320.

<sup>35</sup> *Ibid.*, p. 316.

<sup>36</sup> *Sur Nietzsche, op. cit.*, p. 89.

め、安定した基盤を此岸に探し求めることだけだ<sup>37</sup>。

私たちは理性に、あるいは、科学を介した合理的思考に基づいた認識に、自分たちに関するものの一部を還元することができるし、またそうすべきなのだろう。私たちがこの事実を抹消できるのは、以下の一点においてのみである。すなわち、一切の事物および一切の法則は、偶然の気まぐれ、好運の気まぐれに従いつつ決定されるという一点においてのみ、私たちはこうした事実を消し去ることができるのだ。最終的に理性は、確率論が許容するかぎりにおいてのみ介在するのである<sup>38</sup>。

全てを必然で覆いつくすことは不可能である。論理的思考に立脚した世界の中で身動きが取れなくなっているとしても、ある事柄がどうなるかを完璧に言い当てられない以上、好運が入り込み、必然を覆す余地はある。日常生活においてイニシアチブを取っていたはずの論理的思考を、好運が支配するという逆説が成立するこうした瞬間に立ち会えることこそが、バタイユにとっての好運なのだ。それは一般的な意味での好運からは逸脱した、特殊な好運だと言えるだろう。

### 好運の光景としての戦争

以上、「無神学大全」で語られる戦争の本質を検証し、好運の概念の特徴を確認した。戦争につきまとう忌まわしいイメージと、好運という語の持つポジティブな語感とは相容れないもののように思われるが、バタイユ思想においては、両者は非常に近い関係にある。というのも、戦火の中で、明日の命をもしれぬ不安に満ちた現在を生きるとは、倫理や論理といった規則は当てはめられない、来たるべき可能性に向けて開かれた好運を生きることと重なり合うからである。

バタイユはしばしば、賭けというゲームと重ね合わせながら好運を語ったが、彼にとっての戦争とは、現実世界を舞台に繰り広げられる賭けと言えるかもしれない。さまざまな遊びを類型化し、その特徴および人間にとっての意味を考察したロジェ・カイヨワによれば、賭けとは偶然の恣意性が唯一にして絶対の原動力となる遊びである。完全に受身であるプレイヤーにできるのは、期待と不安のうちに運命の下す宣告を待つことだけなのだ。この点で、

---

<sup>37</sup> *Sur Nietzsche, op. cit.*, p. 129-130.

<sup>38</sup> *Le Coupable, op. cit.*, p. 312-313.

賭けはスポーツやチェスといった、プレイヤーの技量や知性を競う競技形式のゲームと決定的に異なる<sup>39</sup>。言うなれば賭けとは、競技ゲームにおいては不公平を生み出す元凶として極力排除される偶然に、ゲームを差配する権利を授け、偶然に翻弄されることを楽しむゲームなのだ。賭けは、バタイユが言うところの「規則に守られた日常世界」にあつて、好運が思う存分猛威をふるうことのできる稀有な場なのである。

ただし、それは遊びという限られた場で行われることであるから許されているとも言える。再びカイヨワの遊びの定義を引こう。カイヨワによれば、遊びがとり行われるのは、「生活の他の部分から注意深く切り離され、区別された時間的にも空間的にも明確に制限された場においてなされる活動<sup>40</sup>」である。また、遊びという性格上、全ては自身の自発性に委ねられており、プレイヤーは原則的に好きな時にゲームに加わったりおりたりできる<sup>41</sup>。つまり遊びの場は、日常生活とは異なる次元にあるヴァーチャルな世界であり、しかもそこに加わるか否かは、遊ぶ人間が自分の意志で決められるのだ。遊びである以上、賭けもこのカイヨワの原則を遵守している。あとさきを考えずに全財産をつぎ込んだりしない限り、賭けがプレイヤーの日常生活を侵食することはないし、特定の誰かが興じた賭けによって日常的現実そのものが覆される可能性も限りなくゼロに近い。

しかし戦争は、遊びのこのルールを踏破し、まさにその日常的現実を賭場にしてしまう。倫理も論理も関係なしに、好運がその力を十全に発揮する場はまさに日常生活であり、しかも戦争の中で賭けに参加している人間、つまり戦時下を生きる人間には、この賭けを自らの意志で抜ける自由はないのである。好運がもういいと言うまで、賭け金の代わりに自らの命運を携え、人々は賭けに参加せねばならない。

カイヨワは遊びの場を、人工的に作られた、余暇のために取り置かれた「守られた閉鎖的な宇宙<sup>42</sup>」と定義している。ならば戦争とは、いかなる留保もつけられることのない、開かれた宇宙で繰り広げられる賭けなのではないだろうか。この時、好運は現実に付随的な偶然などではなくなる。偶然と必然の力関係が逆転し、「一切の事物および一切の法則は、偶然の気まぐれ、好運の気まぐれに従いつつ決定される<sup>43</sup>」という事態が、理性に守られていた

<sup>39</sup> Roger Caillois, *Les Jeux et les hommes*, Gallimard, 1958, p. 34-38.

<sup>40</sup> *Ibid.*, p. 18.

<sup>41</sup> *Ibid.*, p. 19.

<sup>42</sup> *Loc. cit.*

<sup>43</sup> 註 38 参照。

はずの日常的現実のただ中に起こってしまうのである。第二次世界大戦中に書かれた作品の中でバタイユが好運をめぐる思索を深化させたのは、偶然的な符合ではない。好運の思想は戦争体験を糧に構築されていったのだ。

日常的生の中では限られた場所に閉じ込められていた好運が現実世界に舞い降りた状態が戦争だとすれば、「無神学大全」中で日記風に書かれた戦争体験の記録は、好運の記録とも言えるだろう。それは好運の議論と無関係な余談などではなく、論理的言説とは異なる方法で物語られた好運の光景なのである。以上の仮説に立ち、日記的断章を検討していきたい。次の引用文は、半年にわたる奇妙な戦争の末、1940年5月に進撃を開始したドイツ軍が、フランス北部を占領しはじめた頃に書かれた断章である。特に理由もないのに不安に駆られ、眠れない一夜を過ごした翌朝<sup>44</sup>、バタイユはドイツ軍が順調に進軍を続けていることを知る。

朝、陽光が降りそそぐ庭に下りてゆく。鉄格子の向こうに、このあたりではみなが「司令官」と呼んでいる老人を見つけた。老人は庭師の青いうわっぱりを着ている。生粋の農民独特の人のよい口調で、動揺しつつも、しかしあっさりとして、彼はラジオのニュースを私に教えてくれた。ドイツ軍がベルギーとオランダに入ったそうである<sup>45</sup>。

戦況を伝えるニュースは、平穏で堅固に思えた日常生活に亀裂を生じさせる好運として機能している。それは戦争の進捗と同時に、現在の平穏がいつまでも続く保証はないという事実を、「すべては賭けの状態にある<sup>46</sup>」という事実を告げるのだ。副次的な問題のようであり、戦争中の日常を綴った断章は、『有罪者』の主題のひとつである好運の瞬間を描いているのである。

この断章で、気持ちのよさそうな何気ない朝や淡々とした筆致との対比の中で不吉な知らせが描かれているように、戦争を描いた日記的断章でバタイユは、しばしば平穏な日常と対比させることで、神出鬼没な好運の不気味さを際立たせている。イギリス軍が歴史的惨敗を記したダンケルクで、戦死者の身元確認をする任務についていたという友人の話に続き、バタイユは自身の体験を次のように語っている。

友達の一人は [中略] 1940年5月にダンケルクにいて、死者のポケットを空にするという作業（親族に連絡を取るために）を延々とさせられていた。しかし

<sup>44</sup> Note du *Coupable*, *op. cit.*, p. 520-521 ; *Le Coupable*, *op. cit.*, p. 289.

<sup>45</sup> *Loc. cit.*

<sup>46</sup> 註15参照。

ついに彼が船に乗り込む番がやってきた。結局、彼を乗せた船は逃げおおせ、彼はイギリスの岸辺を踏むことができた。ダンケルクからほど近いフォークストーンでは、白いテニスウェアに身を包んだ人々が、コートの中を駆けまわっていたという。

同様に私は、6月6日、ノルマンディー上陸の日に、広場で露天商たちが回転木馬を組み立てているのを見た。

それからしばらくして、同じ場所で、晴れ渡った空が、空中戦を繰り広げるアメリカの小型戦闘機でいっぱいになった。黒と白の縞模様の飛行機は、屋根の上すれすれのところで急旋回していった。道路や鉄道にむけて機銃掃射しながら。私は胸がしめつけられた。それでいてこの光景は陶然とさせるものだった<sup>47</sup>。

死者のポケットを漁るという禍々しい行為や危険な空中戦は、テニスに興じる人々や夏の風物詩である回転木馬といった平和な日常と対比されることで、その不吉な異質性が強烈に浮き彫りにされている。戦闘機の群れは、不意に落ち来たる好運のように突如として現れ、安定していたかに見える日常的現実を文字通り破壊していくのだ。幸運と不運がめまぐるしいスピードで入れ替わり立ち替わり訪れるこうした光景は、まさに好運の光景と言えるだろう。

## 結

直前の引用文の末尾にあるように、一定の留保をつけながらも、バタイユは戦争に強く惹かれている。神秘体験にせよ賭けにせよ、バタイユが「無神学大全」において問題にしていたのは、理性の統制を受けた日常生活の中の限られた場において行われることであった。必然と偶然の力関係を覆し、日常生活のただ中で神秘体験や賭けを実践しようと試行錯誤していたのが「無神学大全」だとも言えるだろう。ところが戦争は、バタイユがなかなか実現できなかったことを、いとも簡単にしてしまう。つまり、いかなる規則も存在しない好運が猛威を振るう瞬間を、戦争は日常生活のレベルに実現してしまうのだ。バタイユの関心を戦争に向かわせるのは、好戦的傾向や単純な破壊志向ではない。彼が肯定するのは、好運と同質の戦争の力、すなわち日常生活に亀裂を入れ、それを覆しうる戦争の破壊力なのだ。

戦うために戦争を愛する輩の嗜好を私は憎む。戦争が私の心を引くのは、私に不安を与えてくれるからだ。「戦争屋」はこんな感情とは縁があるまい。彼らにとっては、戦争とはおのれの欲求に応える活動にすぎない。彼らは不安から

---

<sup>47</sup> *Sur Nietzsche, op. cit.*, p. 139.

逃げるために前進するのだ<sup>48</sup>。

「無神学大全」期のバタイユは、独特のスタンスに立って戦争を語る。戦争に賛同しているわけではないが、素朴な平和主義者のように戦争を悪として否定するわけでもない。プロパガンダ文学を疑問視していたバタイユは<sup>49</sup>、自らの政治的立場や主張を全面に押し出しながら戦争を語ることもなかった。そして戦争とは一見無関係な思索——神秘体験や恍惚体験、刑苦、好運に関する思索——に耽り、その合間に、思い出したかのように戦争の状況を語り出す。見方によっては、その姿は現世から隔絶した場所で生活を送る隠遁者のそれと重ねられるかもしれない。

しかし実際は、まさにこうした思索を通して、バタイユは戦争に関わっていたのではないだろうか。戦争の不安とどこかで結びつく問題に取り組み、その根源を問う作業は、バタイユにとっては不安の中に見失った戦争<sup>50</sup>を考えることであっただろう。戦闘行為を不安からの逃走と捉えるバタイユにとって、不安を暴力に昇華させずにこうした思索に没頭するとは、不安に立ち向かうことと同義であったはずである。このような形で不安に向かい合うことは、戦場に赴くこともレジスタンス運動に組することもなかったバタイユの、彼なりの戦争の戦い方であったように思えてならない。

本稿では、「無神学大全」中に描かれる第二次世界大戦と好運という問題系が包含する問題の類似を明らかにし、戦争体験が好運の思想の形成に多大な影響を与えていることを確認した。本三部作は戦争の動向と見事に連動した作品であることはすでに指摘したが、それは何も日付上のことだけではない。戦争体験を通して、好運の思想の基軸に関わる問題が見えてきたという意味で、第二次世界大戦はまさに当時のバタイユ思想を支えていたのである。『有罪者』の冒頭で、バタイユは「戦争については語らない。[中略]しかし戦争に無関心というわけでは全くない<sup>51</sup>」という微妙な発言をしている。その言葉通り、バタイユは戦争を本三部作の直接の主題としては論じなかったが、逆に言えば戦争は「無神学大全」の直接の主題の背後に、常にあったテーマだと言えるだろう<sup>52</sup>。断絶しているようでつながっており、つながっ

<sup>48</sup> *Le Coupable, op. cit.*, p. 295.

<sup>49</sup> *Sur Nietzsche, op. cit.*, p. 180 ; « La Littérature est-elle utile ? », *Combat* (1944), *O.C.*, t. XI, Gallimard, 1988, p. 12-13.

<sup>50</sup> 註 19 参照。

<sup>51</sup> *Le Coupable, op. cit.*, p. 246.

<sup>52</sup> 例えば西谷氏は、内的体験と戦争を関連づけて論じている。西谷修、『戦争論』、岩波書店、1992年。



ているようで断絶しているという両義的な関係が、戦争体験とバタイユ思想の間に成立しているのである。

本稿ではさらに、戦争と好運の理論的一致のみならず、理論的思索が展開される断章の間に挿入される戦争を綴った日記風断章を検討し、そうした断章を好運の光景の描写と読み取る可能性を示した。

第二次世界大戦中にバタイユが目当たりにしたのは、戦争によってそれまでそこにあった生活が静かに、けれども着実に破壊されていくさまである。さしたる危機に瀕することなく、空襲警報に怯えながら書きためられた「無神学大全」には、戦争という非日常が音もなく忍びより、不意に日常を襲う様子がいたるところに書き込まれている。それは戦場という異常事態の中で生命の危機にさらされる経験や、モーリス・ブランショが『私の死の瞬間』に描いたような強度を持った特権的な瞬間の体験に比べると、インパクトの弱い体験かもしれない。しかし日常が破壊される可能性と常に隣り合わせにあるという状態もまた、どこかしら人の心に訴えかけるものがあり、それが本三部作の魅力の源泉のひとつとなっているように思われる。

従来の「無神学大全」研究は、その理論的側面を対象にしたものが多く、日記風断章はこれまであまり論じられてこなかった。しかし「無神学大全」はただ理論を展開しているだけの思想書ではなく、文学的価値も高い作品である。そこで展開される思想が持つ知的な面白さだけでなく、「心に訴えかける」面白さを考察することも、本三部作をよりよく理解することにつながるのではないだろうか。「無神学大全」の文学的価値に焦点をあてた研究が、今後よりいっそう輩出されることを期待したい。